

講演会採録

下田歌子研究所講演会

「女性と〈いのち〉の場づくり」

清水博

(しみず・ひろし／NPO法人「場の研究所」 所長・東京大学名誉教授)

伊藤由希子（下田歌子研究所主任研究員）——ではお時間となりましたので始めさせていただきます。私は下田歌子研究所の研究員の伊藤由希子と申します。本日司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

まず私の方から簡単に、本日の講師であるNPO法人「場の研究所」の所長・清水博先生のご紹介をさせていただきたいと思えます。清水先生は、東京大学をご卒業後、各地の国立大学で教鞭を執りながら、また、ハーバード大学やスタンフォード大学でも研究に従事なさっていました。東京大学をご定年後に移られた金沢工業大学で「場の研究所」の所長を務め、その後NPO法人として「場の研究所」を立ち上げられ、現在に至っています。

清水先生は、元々は複雑系研究の第一人者でいらつしやいましたが、生命・〈いのち〉というものを個々のばらばらなものから考えるのではなく、それが存在する場という観念から捉えなおすことの可能性を考え、場の理論・場の思想というものを考えていらつしやったわけです。

私自身も「場の研究所」で八年ほど研究員としてお世話になり、その中でいろいろとヒントを与えていただいたのですが、清水先生はかなり前から、場というものを考えたときに、女性がそこで果たす役割の大きさというものに注目していらつしやいました。私にもぜひそういう研究をしてほしいとおっしゃっていました。先生が公で女性ということテーマにお話しなさるのは、お

そらく今日が初めてだと思えます。そういう意味でも期待してお話を伺いたいと思っております。それでは清水先生、よろしくお願いたします。

清水——伊藤さん、どうもありがとうございます。このお天気の悪い冷たい雨の日に、ここへみなさんにおいでいただいたというだけで、私はたいへん感謝をしております。感動しております。それに値する話ができるかわかりませんが、とにかく私が考えていることをみなさんにお伝えしようと思っております。

地球における「いのち」の持続性ということをもっと真剣に考えなければいけない

私は、地球における「いのち」の持続性ということを、私たちはもつと真剣に考えなければいけないんじゃないかと思っております。たとえば、資本主義経済の競争原理がこの「いのち」の持続性ということを困難にしているというようなことは、私たちも温暖化現象などを通じて身をもって感じているわけですね。それから、福島原発の放射能事故がなかなか収束しませんね。コントロールできているという人もいますが、科学者から見ると、あれはコントロールできていないと思います。

なぜこういうことになってしまったのかというと、私たちは、地球が無限に大きいという考えのもとで文明を作ってきたわけです。その無限大のはずの地球が、人間が考えた科学技術によって、どんどん小さくなくなってきた。そのような状況にもかかわらず、私たちは依然として無限大の地球という発想からなかなか抜けられない。それが今のような問題を引き起こしていると思うんです。私たちはこれから、自分たち自身の考え方をあらためなければなりません。現在の問題の原因は自分たちにあるわけですから、外のものに期待するんじゃないで、自分自身が変わらないといけないと思います。

人間から生きものへ

私は、この地球における「いのち」の持続の問題というのは、人間だけの問題ではないと思います。地球上のいろいろな生き物が一緒に生きていて、それだから人間も生きていけるわけですね。私たちは毎日たくさんの生き物の「いのち」をいただけて生きています。そういう状況の中で、地球が持続されていかないという



ことになる、人間も生きていけないわけですね。これは、子どもでもわかる真理です。だからこれからの時代は、人間から生きものへ、——その生きものの中には人間も入っていますよ——、という時代であると、私は思っているわけです。

それでは、生きものというのはどういうコミュニケーションをして、どうやって生きているのか。それを私たちは本当に知っているでしょうか。考えてみると、何も知らないわけです。人間は自己中心的に生きものの様態を理解していますが、それが本当に正しいかどうか。たとえば生きものの中には競争原理があつて、競争しているというようなことを言いますが、本当にそうなのでしょうか。このことは今日のお話とも関係がありますが、生きものが何をやっているのかを理解するうえで一番大事なことは、人間も、またあらゆる生きものも持っている共通項を発見することです。私はそれは〈いのち〉というものだと思います。

〈いのち〉とは、すべての生きものももっている 存在を持続させようとする能動的な^{はたら}活動である

〈いのち〉というのはどういうものかという、すべての生きものが持っている、「自分の存在を持続させようとする能動的な^{はたら}活動」です。それは植物にもありますし、みなさんにもあるし、



写真 1

犬や猫にも、昆虫にもあるわけです。この共通項の上に立つて、私たちはどういうふうに生きていったらいいか考えなければいけない。人間だけのことを考えている時代はもう過ぎたんです。そういうふうを考えますと、場というものがクローズアップされてきます。場とは、生きものの共通言語です。人間の言語は人間にしか通じないけれども、場というものは、生きものの共通言語であると言えます。私が研究している場の理論というのは、その共通言語の文法に相当するわけです。

ここでみなさんにスライドをお見せしたいと思います（写真1）。この写真では、一箇所からいくつかの植物が出ています。よく見

ると、何種類かの植物がありますよね。これはコンペティション（競争）をしてるわけじゃないんです。一緒に生きていくことによって、共に生きていける状態を作っている。これを共存と言います。一緒に生きていくことは、そこにコミュニケーションがあるということです。生きものは、場を作ってコミュニケーションしている。場が生きものの言葉であると言ったのは、そういうことです。場ができないと、生きものはぶつかるわけです。ぶつからずに生きていくと、おたがいの〈いのち〉を場でやりとりできる。〈いのち〉をいただいて、自分が生きていくことができる。そういうことをきちんと考えると、生や死という概念も変わってきます。

死Ⅱ種を超えて〈いのち〉を伝える活き^{はたら}

これは私の自宅の駐車場の写真です（写真2）。この周囲はコンクリートで固められています。ここへ枯葉が入ってきています。枯葉は自然に入ってくるんですね。枯葉というのは、生命を失ったものの、死んでいるものです。けれど、その葉が持ついた「能動的に生きようとする〈いのち〉の活き^{はたら}」が、まだここに存在しているわけです。そこへ何かの植物の種が飛んできると、ここで芽生えがおきるわけです。この死んだもの——死というものがないければ「芽生え」もないわけです、下はコンクリートですか



写真 2

ら。そしてここでも一種類の植物だけじゃなくて、何種類かの植物が場を作って存在している。

次の写真も非常に不思議なものですけれども、池のところには石があつて、そこに植物が生えている（写真3）。なぜそうなっているのか。それは、一番下に石にくつついて死んでいるものがあるからです。つまり、〈いのち〉というものは、生と死を超えるものです。たとえば、海の中で魚が泳いでいる。その上をおなかをすかせた鳥が飛んでいて、そのままだつたら、ぱつたりと落ち



写真3

て死んでしまうかもしれない。そのときに魚を食べますね。すると、魚が持っていた〈いのち〉が、鳥に伝わるわけです。鳥の〈いのち〉になる。だから〈いのち〉というものは、ずっと伝わりながら、魚から鳥へと種を超えていく——と、そういうものの見方です。死は、種を超えて〈いのち〉を伝える活きはたらをしていますから、死ぬことは単なる物質化ではないわけです。死んだらあなたはどうなるの、と聞かれれば、今の常識では、物になる、物質になると答えるわけですけど、そういう単純な考えでは、生き物

の世界を理解できないということです。

そういうことを考えてみると、競争原理ということだけで生き物の世界を理解してきた今までの考え方は、単純すぎる——、少なくとも、不十分であるということが言えるわけです。そういう競争原理ではない、場面をどうして多くの人は見ないのでしようか。今私がお目にかけたようなものは、その気になれば、みなさんの周りにいっぱい見つかると思いますよ。先入観にとらわれるのをやめて、実際に生きている生き物の現場を見ることが大切なわけです。そうすると、生き物は共存している——共に存在している。ある生き物が生きていくためには別の生き物が生きている必要があります、共存をするというかたちで地球の上で続いてきた。そこで重要になるのが、場というものなわけです。場に興味を持つ人は、ぜひ「場の研究所」へ訪れてほしいと思います。生き物が生きている状態を理解したかったら、生き物のコミュニケーションを理解してほしいと思います。

〈いのち〉について認めてよい真理：〈いのち〉の二重性

そういう中で、〈いのち〉について認めてもよい真理というものがあると思います。私はそれを二重生命と呼んでいます。〈いのち〉の二重性と言ってもいい。

それはどういうことでしょうか。私たちの体は、約六十兆個という非常にたくさん細胞からできています。その細胞はそれぞれ「いのち」を持って生きているわけですね。それぞれの細胞は、生まれて生きて死ぬ、ということそれぞれ独立にやっています。そしてその全体を包んでいる体、個体としての「いのち」――、私だったら清水博としての「いのち」というものがあつて、その中に細胞の「いのち」がある。じゃあ清水博の「いのち」はどこから来たのかと言われると、それこそ本日の大切な問題ですね。これをもう少し広げて考えてみると、地球としての「いのち」があつて、その中にいろんな生き物が生きて、そこで生まれて生きて死んでゆく。

私たちの体の中で細胞が死ぬということも、私たちの生命現象です。細胞が死ななければ、私たちも生きていきません。たとえばどこからウィルスに感染して、インフルエンザになったとしますね。私たちの体には免疫という反応がありますが、これによって体の中で新しくさまざまな細胞をどんどん作っていきます。でもその中でこのウィルスと関係ないものは死んでいく。このようにして、鍵と鍵穴のようにウィルスにくっつく細胞ができてくるんです。つまり、多くの無関係な細胞の死ということが生命現象なんです。「いのち」ということを見てみると、それがわかるんです。ものとして生き物を見ていると、このことはわかりません。

みなさんにも「いのち」があつて、みなさんが死ぬときはどうなるのかという問題は、みなさんご自身の問題ですよ。みなさんはただの物質になる――、そういうことでいいのですか。

弱者を切り捨てることは、未来を切り捨てることになる

話をもう少しすると、地球の上に弱者がいなければ、強者も存在できません。人間が一応強者だとすると、人間は毎日何かを食べていますが、人間を食べているわけじゃないですね。自分よりも弱いもの――弱者を食べている。そのとき、もし地球が無限に広がれば、弱者をいくら食べてもまた湧いてくるわけですね。イワシつていう魚はどれだけ食べてもいいんだと、以前はそう思われていました。食べてもまだどこから湧いてくる、と。けれどこれは、地球が無限に広がれば、です。だけど実際はそうじゃない。地球は無限ではないわけです。イワシを全部食べたら、イワシはいなくなる。ウナギはもうそうなっていますね。あるいはマグロもそうなっているでしょう。

そうすると、強者の存在を決めるものは何かというと、弱者であるということになります。強者が弱者の存在を決める、ということが言えるのは、地球が無限大のときだけです。地球が実は小さいということになると、逆になってくる。そうすると、わずか

な弱者をとろうとして、強者同士のおつかり合いが起きる。今、国際関係でややこしいことの一つが、強者同士のおつかり合いです。たとえば中国と日本の間で起きていることは、地球が無限に広ければ起きないであろうことです。そういうことをきちんと考えずに、いつまでも強者の論理だけに立っていくと、生きていけないわけです。

さきほど申しました大きい〈いのち〉の中に小さい〈いのち〉があるということ、これが〈いのち〉がコミュニケーションをして生きている、コミュニケーションをして存在する生き物のかたちなんです。二重の生命というかたちです。大きい〈いのち〉がコミュニケーションの場となっている。場というものが、実は大きな生命体の生命なんです。〈いのち〉の場といつてもいいでしょう。私は今そういう理論を作っているんですが、小さい生命体の〈いのち〉が、自己組織という仕方で見ずからつながって、大きい〈いのち〉になっていく。そういう議論は世界にまだないので、私は生きているうちにそれを作ろうと思っているわけです。

「市民の論理」の裏には「強者の論理」が隠れている

市民ということがよく言われますよね。ですが、市民の論理は、もう古いんです。どうしてかという、市民の論理は一重生命の論

理です。だけど実際生きていくには、二重生命——場の中の〈いのち〉という状態にならないと、コミュニケーションをしていく形はできません。だから一重生命の論理と二重生命の論理はぶつかります。

イスラム国に参加する若者が増える一方ですよ。なぜか。あそこで一重生命と二重生命の論理がぶつかっているからです。どっちが良いとか悪いとか、そういうことは言いません。やはり市民の論理も、市民の論理以下の状態から見れば必要なのです。非常に大事なことです。フランスのような国では、市民の論理を非常に尊重しています。けれど、二重生命というかたちですと生きてきた国があるとしたら、市民の論理の一重生命のかたちでは生きていけないわけですね。ですからそこでは両方の論理がぶつかります。ぶつかったときに、ほとんどの場合、一重生命が負けてしまいます。

弱者を切り捨ててはいけません！

これはベトナム戦以降、ずっとアメリカが経験してきたことなんです。アメリカは結局一つも成功していないでしょう。場にくっついたものがあつて、それと個人が戦つても、場をつぶすことはできない。個人が戦つて勝てるのは、個人しかないわけです。

つまり、弱者を切り捨てようとしてはいけないんです。弱者があつて強者も生きていくし、弱者と強者が一緒に生きていくから、共存の場ができる。強いとか弱いとかそういうことに関係なく、地球の上で一緒に存在しているということに価値があるんです。今はそういう時代です。一緒に存在して、そこで何をやっていくのかというと、それはおたがい「いのち」を与え合うということです。これはボランティアなどのかたちで人間が学んできたことですね。自分の「いのち」を自分だけでキープしていたら、これは自己中心主義になつてしまします。

居場所となると自分に自分の「いのち」を差し出すこと、これを私は「与贈」と言っています。この「与贈」ということがいくつか起きると、そこに居場所の「いのち」が生まれてくるのです。家庭というものを見ていたらわかりますよね。家庭も一つの生き物です。人間がいなければ家庭も生まれません。それは、たんなる住宅ですよ。人間がいるから家庭になるんです。人間の「いのち」があるから家庭になるんですよ。人間の「いのち」がそこで一体何を生み出しているのか。家庭に住むときは、自己中心主義で生活したら家庭は崩壊しますよね。今日子供の笑顔が見たいな、と、お父さんが乏しい財布をはたいてケーキを買つていく——それは家庭の喜びになるわけです。自分が差し出すということ、与えるということが、喜びになるわけです。これが

「いのち」の「与贈」というものです。だから、家庭に犬がいるだけでも違いますね。犬は家庭に、犬としての「いのち」を「与贈」してくれます。そうすると、人間の方も「与贈」したくなる。そういう関係があつて、生きものの共存ということが起きていく。

この「与贈」の関係を、家庭の中だけじゃなくて地域社会に広める、さらには地球に広めることが、これから必要になつていくわけです。たがいに与え合う関係になつて、弱いものも強いものも、弱い・強いということを問わずにみな大切で、存在してくださつて本当にありがたいとございますと、おたがいにそういうことを言っていけることが、今求められていることなんです。

強者の論理から弱者の論理へ

人間が存在しているということは、生きていくということなんです。存在しているということは、いま生きていくということじゃないですよ。生きていく、——という形で未来に向かって能動的に存在している、これが「いのち」の活はたらきとともにあるということです。

生きていくことができないと、「いのち」の活はたらきがおかしくなつてくるといふことです。たとえば、会社に勤めている。上司か

らどんな仕事を押し付けられてしまうと、そこで人間として生きていく、ということがわからなくなっちゃうわけです。これだけのことを今日中にこなさないといけないということに忙しくなつて、与え合うということ、《与贈》があつてこそ上司にとつても自分にとつてもいい居場所ができるのに、そういうことがなくなつていく。生きものというのは、さきほども言つたように、与え合いのネットワークの中に存在しているからこそ、強い人も弱い人もそれとして価値があるのです。そういう与え合いからはずれてしまつたら、その本人が自分に価値があると思つていたとしても、地球的な意味では価値があるとは言えないわけですね。

弱者の論理というものは、家庭のことを考えたらよくわかります。家庭がうまくいくということは、家庭の中で一番弱いものがちゃんと生きていけるということです。赤ちゃんが生まれた、けれどこれは弱いからどうなつてもいい、ということではないですよ。赤ちゃんがきちんと生きていける、これが家庭なんです。これは赤ちゃんだけが生きていける、ということではもちろんないわけです。一番弱い赤ちゃんが生きていけるということは、そこではみんなが存在できる。みんなが幸せに存在できるから、家庭がうまくいく。つまり弱者の論理というのは、共存在の論理なんです。

強者の論理というのは、そうじゃないですね。ヨーロッパに行くと、自分が生きていくだけが大切で、弱いものはどうでもいいということを使う人がいますね。仏教というのは弱い者の論理だからいかん、と。そういうことを言うのは、強者の論理を自分が信じているからです。ハイデガーの哲学というのはヨーロッパの存在論として有名ですが、それはとことん考えていくと、強者の論理なんです。日本に住んでいて良いことの一つは、弱者の論理を知つていくということです。弱者の論理というのは共存在の論理で、これはいわば、弱者も強者も存在できるという《いのち》の居場所の理論です。さきほどお目にかけたような植物は、強い・弱いで生きているわけじゃないんです。共に生きていくことによつて、生きていけるわけです。だからそのために、何かを与えているわけです。一緒に生きているメリットがなければ、こういう状態になるわけがないんです。

自然の大災害によつて教えられてきた弱者の論理

日本人は大災害の地に住んでいますよね。いつ大地震が起きて、いつ津波が来るのかわからない、そういう所に住んでいる。自然の脅威を昔から感じていた。それなりに居心地の良い場所という優しい母としての自然と、大災害というかたちの厳父の厳しさと

しての自然という両面が、日本の自然にはある。私たちは厳父の厳しさをもって、自然とは何であるかということを教えられてきたわけです。そういうことが代々積み重ねられていきますと、これは弱者の論理になりますね。ここでは、死んでいく人は死んでいけばいいじゃないか、とは言えないわけです。一緒に生きていくことができないと、コミュニティというものはできないですね。今、東日本大震災の後、なかなか復興が進まないのは、お互いがいきなり強者の論理を出してくるからなんです。弱い人をどうするか、そこから始まらないといけない。弱い人のために何かを与えることができ、それが喜びである――、そういうふうになつていく必要があるわけですね。そしてその弱者の論理が、家庭においても弱者の居場所を作るといふ母の知、母性として代々伝わってきたと私は思っています。

自然の大災害が少ない近代の欧米は「強者の論理」

ヨーロッパに行つて向こうの家庭に接してみると、やはり最終決定権を持つているのは父親です。宗教もそういう格好になつている。そこが日本の家庭と違うわけですね。私たち日本人は、社会的には男性がいろいろ活躍するけれども、家庭に入ったらやはりどうもお母ちゃんには頭が上がらない、と。まあ、私なんかは

頭下げっぱなしで生きてるわけですけれども。みなさんもそれに近い状態じゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。

でもなぜそうなっているのか。私たちは女性を通じて弱者の大切さを学んでいるんですね。私も以前は家内のことをそれほどは評価していなかったんだけど、犬を飼ったときに家内の偉さがわかったんですね。なぜかと言うと、犬が今何を考えているのかということが、家内にはわかるんです。私には犬の考えていることなんて全然わからないんですが、家内はいわば場のコミュニケーションができるわけです。ああ、こういうことで子供を育ててくれたのか、と、初めてわかったんです。それはやっぱり本当の知だと思いますね。

欧米には、日本のような自然災害はあまりありません。だから父親と母親の関係が日本とは違つてもいいわけです。それで欧米では強者の論理による女性論というものが生まれてきたわけですが、これは一重生命による女性論です。

今、日本政府も女性が活躍できるようにいろいろがんばつていて、女性が強者として伸びていく、自分がしたいように未来を作れるということを目指していますね。私もそれは大事なことだと思うのですが、ここで申し上げたいのは、弱者の論理による女性のあり方というものが、日本にはある、そしてこのことが、これから私たちが地球の上で生きていく上で本当に大切なことかもしれない

れないということです。

昔、下田歌子女史がここに大学を作られた。その心の中に何かあったか私にはわかりませんが、家政という考えの根底にも、やはり弱者の論理というものがあるんじゃないかと私は思っています。これはぜひこの下田歌子研究所で研究していただきたいと思うことです。

ほんとうの豊かさを求めて〈いのち〉の居場所

地球や私たちの未来を考えていると、本当の豊かさって何だろうかと思います。私は、私たちが〈いのち〉を作るといふ能力を持つていると思っています。たとえば病気になるたときに、病気の細胞に代わる新しい細胞がいつばい生まれるでしょう。私たちの中に〈いのち〉を作る力がなければ、そんなことはできません。良い家庭を作るといふことだつて、みなさんが〈いのち〉を作るといふはたらきを持つているから、家庭の〈いのち〉というものが生まれてくるのだと私は思っています。そして、そういうことを経済の一番基盤に置きたいのです。

私たちは、印刷されたお金そのものに価値があるものだと思っているわけじゃありません。お金は何かの価値を表現している記号です。では、その価値とは何だろうかとことん考えたら、そ

れは〈いのち〉というものではないか、富というものの根底は〈いのち〉ではないかと私は考えています。つまり、本当の豊かさというのは、〈いのち〉という富を増やしていくことだと、私はそう思っています。豊かな社会というのはお金を持つてゐる人がいっぱいいる社会ではなくて、〈いのち〉が豊かで、そこにいることで幸せな感情を持つて生きていける社会のことなのではないでしょうか。豊かな家庭、というのも、同じことだと考えています。

これからの社会の理念というのは、このような〈いのち〉の豊かさというところに置かなくてはいけないなと私は思います。そしてそのためには、弱者の論理が広まることが大切だと思います。そうすると、そこで一番大切にしなければならないのは、弱者が持つている問題なんです。弱者が生きていくために必要な問題を、いろいろな立場の人が、立場を超えて共有するということなんです。そうして〈いのち〉の居場所としての地域社会を作り上げる。

たとえば大震災のような災害があつた地域をどのように復興させていくか。それには〈いのち〉の居場所を作りましょう、ということなんです。そこに行つたら豊かな思いで生きていける、そういう社会ができたからこそへみんな集まりますよ。〈いのち〉の居場所には過疎化がありません。

地域社会を「へいのち」のドラマの「舞台」とする 居場所づくり

これからの地域社会というのは、〈いのち〉の「大きい家」になる必要があります。ここで言う「大きい家」というのは、みんなが与え合うことによって弱者を大切に作るドラマが生まれる、そういう居場所のことです。

たとえば日本には今いっぱい高齢者がいますね。高齢者を介護する介護士などの専門家を増やすのも大事なことです。ただ、それだけでは経済的にバンクしてしまいます。第一、高齢者が増える割合と同じくらいに介護の専門家を増やすということ自体が難しいですね。このように社会の高齢化に伴ってさまざまな問題が出てくるのですが、そこで大事なのは、「助ける者」と「助けられる者」を分けないということです。これはつまり、弱者の方の問題を共有して、共に生きるということです。助け合うということ、〈いのち〉を差し出すということです。それが喜びになるような社会を作らなければいけないんじゃないか、と。

よく、高齢化やさまざまな問題の「専門家」という言い方をしますね。そういう人たちに重きを置くこと、そういう人たちが必要だということは認めますが、だけどそれだけで問題は解決しない。専門というものを一回捨てないといけません。自分の専門と

違う人の問題をちゃんと受け止めて話を聞くということです。知恵を合わせて〈いのち〉をつないでいくという、そういうことが必要です。

北海道浦河の「べてるの家」

北海道の浦河に「べてるの家」というところがあつて、みなさんもご存知かもしれませんが、そこには精神障害を持っている人たちの病院があります。その病院では最初は専門の先生が患者さんを診ていたんですが、そのかたちではどうしてもうまくいかない。ということで、患者さんたち自身がその主人になっちゃったわけですね。つまり、「助ける」「助けられる」という関係を超えた新しい世界が生まれてきた。それが「べてるの家」なんです。そのかたちを作っていた向谷地さんという介護の先生の話聞いてみると、その活動が根底では、キリスト教のパウロの影響を受けていることがわかります。パウロはどういうことを言ったか。「私は弱いから強いのです。弱さを誇りましょう」。つまり弱さというものが、弱点ではないんです。みんなが弱さというものに注目して生きていくということによって、温いつながりが生まれるということなんです。つながりの中にあるから強いんです。宗教ってこういうものなんです。神様という実体があつて、と

いうのではなくて、そこにあるのは大きな居場所の〈いのち〉の活き^{はたら}を受けることです。

では、その〈いのち〉の活き^{はたら}が自分の中で活か^{はたら}くようにするには、どうしたらいいのか。たとえば家庭の〈いのち〉というのはみんなで作っているわけだから、個人の〈いのち〉とは違いますね。だけど家庭の中に入っていくと、自分がなんだかほつとする。これは、家庭の〈いのち〉が自分の中で活か^{はたら}くからです。パウロという人は、「信徒の身体は神様の神殿だ」ということを言っている。みなさんの中に神の活き^{はたら}があらわれる、と。だから弱さを誇りましょうということになる。強さということだけに注目したら、「ベてるの家」なんてすぐ潰れちゃう。弱いところへ目線を移したから、そこに新しい社会が見えてきたわけです。

南愛知の医療生協（開かれた助け合いの場）

南愛知に「医療生協」というのが生まれています。これは、伊勢湾台風で二メーターを越すような波が押し寄せてきて、五千人くらいの人が死んだ。で、そこに診療所を作りましょうということで、地域のお医者さんが小さな診療所を作った。それをバックアップしたのが、地域の女性たちなんです。女性の活き^{はたら}によって、あの地域の「大きい家」ができて、今や開かれた助け合いの場にな

っていますね。どんどん発展している。これは与え合う関係です。それで、そこに「なも治療」というのがあるんですね。「なも」というのは、名古屋の人が「なも」といったように最後につける言葉があるんですが、これは打ち解けた関係のときに使う言葉です。そしてそこでは古い住宅があつて、認知症の方が何人か一緒に生活しているんですが、さきほど言ったような専門家と専門家じゃない人、という関係ではなく、みんなが助け合う関係としてそこに入ることができるんです。そうすると、自分はその中でこういうことをやる、ということそれぞれの人が発見するわけですね。自分がこれをやるとみんなが喜ぶんだ、と。そういうことを通じて、認知症がよくなっていく。そういう治療が今、「なも療法」という名で呼ばれています。

生協しまね「おたがいさま松江、おたがいさま出雲」

それから、島根県に「生協しまね」というのがあります、そこで何年もかけて組合員がたがいに助け合う「おたがいさま」という組織を作ってみました、それがいつの間にか広がって生協だけではなくて、いろんな組織の人が一緒に、それに行政もつながって、「おたがいさま松江、おたがいさま出雲」といった社会的な「大きい家」ができてはじめたということです。そこでは困っ

たときには気軽に声をかけられる、おたがいさま関係が必要じゃないか、というわけです。つまり、「看る人」と「看られる人」という関係ではなくて、みんなが同じ弱者としての立場に立つということです。たがいに弱者の立場に降りていくことが、地域社会を「大きい家」^{はな}にしている。そこでも、そういうものを作っていく創造的な活き^{はな}をしているのは、その地域の女性の方々です。家庭の中の知恵を地域に開くことによって、新しい世界が生まれてくるかと思えます。家庭に閉鎖性があれば、やつぱりその限界にぶつかりますね。だからそれを社会にうまく開く、と。その開き方を発見すれば、そこに新しい世界が生まれるんです。

女性には〈いのち〉の夢を育てる愛の力がある！

女性による〈いのち〉の夢の共創こそが地球の夢でもある！

私は、女性は〈いのち〉の夢を育てる愛の力を持っていると思います。私自身のことを考えましても、私の父親は、「早く就職しろ、いつまで学校に行っているんだ」と会うたびに言っていました。けれど、母親には夢があったんですね。私はその夢に助けられていました。それと担任の先生にも、私は商売したら危ない、「お前、父親の跡だけは継ぐなよ」ということを言われまして、それで学問をやることにしたんですけれども、そういう〈いのち〉

の夢を育てるところが女性にはあるわけです。

〈いのち〉には夢があります。それを育てる愛の力を、女性は持っている。そしてそうした〈いのち〉の夢を、自分の家庭だけではなくて、社会に広く開くことによって、新しい社会が生まれてくる。その中で、自分も生かされていくんです。それによって生きがいのある一生を送ることができます。そうして、その人の持っている〈いのち〉を、次の人が受け取って続けてくれる。つまり、女性による〈いのち〉の夢の共創ですね。女性の共創、「共に創る」ことには、日本の状態、そしてこれからの世界を変えていく可能性があるんです。

どうもご清聴ありがとうございました。



〈いのち〉とは、すべての生きものがもっている存在を持続させようとする能動的な活きである。

地球における〈いのち〉の持続性ということをもっと真剣に考えなければいけないのではないか

——資本主義経済の競争原理がこの〈いのち〉の持続性を難しくしていることは、地球の温暖化現象や福島原発の放射能事故の影響がいつまでも収束しないという経験を通じて、もう十分わかっているのではないか。

〈いのち〉について認めてよい真理：〈いのち〉の二重性

- (1) 生きものは地球から〈いのち〉を受けて生まれ、地球の一部として〈いのち〉を持続し、そして地球に〈いのち〉を返して死ぬ
- (2) 細胞の活き^{はたら}によつて個体がその〈いのち〉を持続させて生きるように、地球は生きものの活き^{はたら}によつて、その〈いのち〉を持続させながら生きている。

弱者を切り捨てることは、未来を切り捨てることになる

弱者がいなければ、強者は地球の上に存在できない。それは弱者の〈いのち〉を受けなければ、強者の〈いのち〉が持続しないからである。

地球が無限に広ければ、弱者はどこから湧いてくるが、地球が狭くなれば、強者が弱者を食いつぶし、やがて強者が強者の未来を決定する力をもつ。そこで、強者の間で深刻なつぶし合いが始まる。

「市民の論理」の裏には「強者の論理」が隠れている

市民の論理も地球に向かって使えば「強者の論理」となる。市民になれない者に向かって使っても「強者の論理」となるから、「窮鼠猫を食む」の状態になる。

グローバル化した資本主義経済は「市民の論理」を武装させる。

弱者を切り捨ててはいけない！

強者の論理は〈いのち〉の一重性

弱者の論理は〈いのち〉の二重性

弱いから必要なのではなくて、弱い、強いとかに関係なく、共に存在していることに大きな意味があり、また価値がある。つながっているということは、互いに与え合う関係のなかに

自分の存在も位置づけられているということだ。

与え合うことによって居場所の〈いのち〉が自己組織される。

強者の論理から弱者の論理へ

生きものの存在を回復させるのは〈いのち〉の活^{はたら}きだ。

存在を回復させる〈いのち〉の居場所とは、〈いのち〉の自

己組織がおきやすい場所のことだ。

弱者の論理とは共存在の論理だ。それは結局のところ、強者

も弱者も共存在できる〈いのち〉の居場所を共創することなのだ。

自然の大災害によって教えられてきた弱者の論理

絶えず大災害に見舞われてきた日本列島に住んで、厳父の厳しさをもって教えられたこと、それは弱者の論理であった。

その弱者の論理が、家庭においても、弱者を包む〈いのち〉の居場所をつくる母の知として受け継がれてきた。

自然の大災害が少ない近代の欧米は「強者の論理」

強者の論理における女性論（一重生命論における女性）

弱者の論理における女性論（二重生命論における女性）

ほんとうの豊かさを求めて〈いのち〉の居場所

〈いのち〉という富を増やしていくことに、これからの社会の理念をおくべきだと思う。

そのためには弱者の論理の活用が必要である。

伝来の母の知を社会に開いて〈いのち〉の居場所を共創しよう。

南愛知の医療生協、生協しまね「おたがいさま」

伊藤——清水先生どうもありがとうございました。まだ残りの時間がございますので、これから会場のみなさまとの質疑の中で、先生のお考えをさらに深く伺っていきたいと思います。

その前に、司会の立場から、先生の今のお話を伺ったことと下田歌子の考えをお願いします。いま先生のおっしゃっていったことと下田歌子に家政というもの、家というものを大事にして、家政学の教科書を明治のかなり早い時期に書いた女性でしたが、下田はその家政を、男性がやっているような国政や外政に対して、内政——まさに内の政なのだ、と、これが女性が担っている大事な役割なのだと説いていました。男性たちがやっていることは、今日の清水先生のお話で言えば、一重生命というか、強者の論理に近いものがあるのかもしれない、でも女性がやっている内政というのは、弱者の論理というか、弱い者もその中で生きていけるような場を作ることであり、それは男性たちにはできないことなのだ、と。だからこそそのことに誇りをもつてやっていかなければならない

のだということを、下田は言っていました。

たとえば下田は家政と並ぶ女性の大事な役割として、趣味の源泉たることをあげています。趣味といっても余暇的な楽しみのことだけを指すのではなくて、豊かな美的要素とか、日常をちよつと楽しくすることとか、そういうことは女性こそができるのだというようなことを言っているんですね。

たとえば下田は、こういうような言い方をしています。「女性美は……優雅高尚で、和氣藹々たる点に存するのでありますから、男子が常に外界の事業に従事して、頭脳を使役し体力を竭し、殆ど空漠無趣味の人とならうとする時に、婦人の優美温雅なる慰藉内助によつて、其の精氣を復活する事は、宛然重病者が仙薬を得た様であると云はれて居ります」(『婦人常識訓』)。少し男性に対しては失礼なようなものの言い方である気もするのですが、女性が持っている力というものについて下田の言っていることと、清水先生が女性に期待されていることとは、おそらくつながっているのではないかと思います。

では、どうぞこれから、みなさまいろいろなお立場の方がいらつしやると思いますので、ご質問、コメントでもけっこうです、何かある方は手を挙げてご発言いただければと思います。

会場1—— 目白大学の吉原と申します。今日は何年ぶりかで清水先生にお会いしました。

ひとつお訊ねしたいのは、日本では、私の記憶では一九九七年あたりから、「連携」という言葉がよく使われるようになりました。実際に行動に移すような種類のものなのか、言葉だけなのかはよくわかりませんが、こういった言葉がよく使われるようになっていくことは、今の資本主義の競争原理がうまくいかなくなつた証左だと私は思っています。

それで、先生のおつしやる共存在の原理、そのキーワードは「連携」じゃないかと私は思っているんですけども、先生はこの点はいかがお考えでしょうか。

清水—— 存在ということはどういうことかという点、それはさきほども言いましたように、未来へ向かつて生きていく、ということなんです。未来がなくて単にここにいて、というのは、存在じゃないんですよ。だから今、日本の社会では存在が損なわれているわけです。



じゃあ存在を回復するにはどうすることが必要なのか。そこで求められるのが弱者の論理なんです。弱者の論理ということは、弱者も生きていける状態をあらわします。私はこれを「弱者を含めた〈いのち〉のドラマ」と言っています。未来に向かって続いていく状態を作る——それは自分が「取る」だけではできませんから、これから大切なことは、いかに「与える」かということです。それは今の時代の人々の目にも非常に魅力的に映ると思います。大学などでもそういう雰囲気は出てきていて、たぶん共生ということがこれからの大事なキーワードとして出てくると思うんです。

〈いのち〉を与えあうという、そういう大きい意味でのドラマが、地球の上で続いてきています。そういうドラマを、たとえば料理なら料理の哲学として表現すること——他の生き物の〈いのち〉をいただくということの意味はどういうことなのかなどを、いろいろと考えていくことが大切です。

〈いのち〉をもっているものが一緒にいようとするならば、それぞれがまったく同じものにはなるということではできません。一卵性の双子が生まれ出たら、一緒に生きていると、どこか変わらないといけない。なぜかという、私たちの存在が未来に向かって一緒に生きていくもの、ある意味でドラマを作るものだからです。そのとき、私たちの存在は未来に向かってシナリオを与えられているわけじゃなくて、シナリオを作りながら生きている。それを私は〈いのち〉のドラマと呼んでいます。ところが、ドラマの中でまったく同じ役をする人が二人いたら、ドラマが動かなくなってしまう。だから、それぞれが自分の未来を作りながら生きていくことが必要なわけです。

それと、たとえば今ここにテレビを百台並べて置いて、放送局の電波を受けたら、みんな同じものを見せるわけですね。生命の世界というのはそういうものではなくて、それぞれが違うからこそ広がるわけです。

みなさんご存じのように、電子は、たがいにまったく同じ状態

にはならないように動くんです。まったく同じ状態になってもいい素粒子もあって、それは「ボゾン」と言います。光の粒子である光子は「ボゾン」ですから、みんな同じ状態になります。そうするとレーザー光のように強い光線になります。しかし、そうすることで一つの状態に固まってしまうわけです。

ところが宇宙が広がっていくことができるのは、おたがいに同じ状態にはならないという電子のような「フェルミオン」という粒子があるからなんです。「フェルミオン」には同じ状態にはならないという性質があるからこそ、拡がることのできるんです。

このようなことは人間の知としてまだ十分ひらかれていませんが、一緒に生きていく「大きい家」というものの中では、それぞれが違わなくてはいけないんです。そういうことを私たちはもつと学ばないといけないですね。共存とはそういうものです。みんな一緒の状態になるということではないんです。みんな違うということなんです。みんなが違うということによって問題を解決するのが、共存なんです。

伊藤——清水先生ありがとうございます。

今のご質問で、「連携」という言葉が出てきたのは、資本主義のある種の限界ゆえなのではないかというご指摘があつて、このことは資本主義についての先生のお考えとも関係してくるんじゃない

ないかと思うんですけど、いかがでしょうか。

清水—— 申しわけありませんが、音声が四十%以下しか言語として聴き取れないという難聴のために、勘を交えてお言葉を理解しているために、ピント外れになった点があるのではないかと思えます。競争に勝つために連携するということもありますから、それだけでは何とも言えないという気がします。

今の日本社会は、二つに分かれているんじゃないかと私は思います。一つはTOYOTAさんのような大企業に代表されるような、資本主義の道です。グローバル化された資本主義の道を進んでいく状態です。だけどそれだけでは生きていけない人もいっぱいいる。

私もときどき地方へ行きますけれど、そういうところでは、生きていくということが、売ったり買ったりというかたちを超えないとも続かないという状態になってきていますね。過疎地域ではそういうことが起きています。そうすると、今までと違った原理——私が先ほど言ったような「いのち」という富を大切にする原理、そういうものを重視する動きが始まっているわけです。中小企業は主にこちらの方向に動いていると思います。大企業と中小企業とが、そういうようにそれぞれに分かれているというのが、日本の現状じゃないかと私は思います。

場の研究所のような研究所は、大企業からは一銭もいただけないですね。けどもう十年NPOをやっています。こういう取り組みを続けさせてもらえる——、サポートしてくださる方が日本にはいらつしやるんです。来月にはつぶれるかつぶれるかと言いながら、ちゃんと十年続いてきた。やつぱりすごいことだと思えます。そういう底流があつて、そこからひとつの未来へのかたちが模索されるんです。

ピケティというフランスの人が資本主義について書いた本がありますね。彼のような考え方も一つの考え方ですが、あれだけじゃないです。いま言ったように、生命の底流をちゃんと作っていくという方向に国が変わっていく——、そういう可能性も日本は持っているということです。

今大企業がやっているような資本主義を、このまま何年続けることができるのか、ということですね。資本主義が進められている一方で、日本の国の借金が増えていつているわけでしょ。いつまでこのようなことをやっているとですか。どこかで何かが起きたらもう——、お金というのは現実の富を反映していないわけですからね、これは現実の富を反映していないとみんなが了解してしまつたら、おしまいですね。だからそのときに、現実の富とは何であるかということをちゃんと考えておく必要がある。私は「いのち」の豊かさというものが富だと思っています。

伊藤——ありがとうございます。では土井さん、お願いします。

会場2——「おいしいもの研究所」の土井善晴でございます。

清水先生には、以前からいろいろとお話をうかがう機会があつて、今日も随分と私の家庭料理という仕事との関わりに共通するお話をうかがうことができ、また、さきほどの伊藤先生の「家政」というお話も私の仕事とたいへん重なるところがありました。

たしかに女性というのは、お料理を一つ差し出しても、小さなことに喜んでくれるんですね。ですから喜んでもらえるという点では、お料理する側にとつても女性というのはとてもありがたいくて、嬉しく思えるんです。ですから、下田先生の言葉にありました「男性が趣味をいつのまにかどこかに落としてきている」ということに、私はすごく共鳴するところがありました。

そんな中で、清水先生がお話しされた、女性には〈いのち〉の夢を育てる力がある、ということ、私にとつてもありがたい言葉だったと思います。そういう〈いのち〉の夢ということについて、もう少し詳しくお話をうかがえますでしょうか。

こういう場を離れて現実の生活にもどりますと、資本主義の大きな流れの中ですぐに忘れてしまう、けれど存在として大事な価値をもつことについて、具体的な言葉あるいは方法やメッセージをお話しいただけたらと思います。

清水——〈いのち〉という富が、土井先生が作られている料理にはあるですよ。それに対して、そこで買つて食べるものは、なぜおいしくないのか。そういうものを毎日を食べ続けていると、拒絶反応が体から出てしまう。これを〈いのち〉という富という点から、ご一緒に考えてみたいと思うんです。

いま、「情報」にかたちを与えるということは、すごく大事なことです。かたちを与えることで、「情報」というものが、I T的なものから「意味」という方向へ変わつていきます。I T化された「情報」を携帯でいじつてただけでは、それはまさに「情報」で、量産できるようなものになつてしまうわけです。それを「もの」のかたちにする、「もの」を作ることで、自分自身の行動や行為が関わつていくわけです。自分の活はたらきが関わつていくためには、やはり「もの」のようなかたちじゃないと、共存になれない。

さきほど写真をお見せしましたが、私はお天気がいいと、自然から学ばんです。私がマスターで写真を撮るんじゃないんですね、自然がここを写してほしいと思うものを写さないとけないんです。そういうことによつて、さきほどのようなことをいろいろ発見するわけですね。〈いのち〉を写すと言つてもいい。〈いのち〉というのは目に見えないものであるけれども、ここに〈いのち〉の活はたらきがあつて、それを写す。みなさんにもそういう趣味を一緒

に持っていたら、そういう〈いのち〉を写した写真をおたがいに見せあうことができます。それは土井先生の場合だったら料理というかたちかもしれないですが、重要なことは、そこに〈いのち〉が写っているかどうか、です。そこに個の存在を超える共存在——〈いのち〉の共存在があるかどうかです。

単なる情報とか言葉を「もの」と結びつけるということをしてほしいんです。そこに何か見えてくるものがあると私は思います。

伊藤——ありがとうございます。

いま土井先生のお話をうかがいながら、女性はやつとしたお料理の盛り付け方とかでも「わあ」と喜んだり、お洋服のちよつとした刺繍が可愛かったら「あ！」と気づいたりとか、そういういわばワクワクを見つけるのが上手な人が多いのかなという気がしました。それは清水先生の言い方をお借りすれば、〈いのち〉の色というか、彩色、鮮やかな色というものに気づくことが、女性には多いような気がします。

見田宗介先生という社会学者の方が、「いのちが沸き立つ」というようなことをおっしゃっていますけれども、そういう「沸き立つ」感覚を感じ取る能力に長けた女性が多いのではないか、そしてそれは〈いのち〉の共存在——「沸き立つ」というのは単に個人的なものではなくて、もつといういろいろなものとながつてい

る、どこかすごく深いところから出てくるのかなというようなことを、いまお話をうかがっていて思いました。

他にいかがでしょうか。

会場3——実践女子大学生活科学部の河井と申します。私は十代の頃、清水先生の本はほぼすべて読ませていただいていたので、今日はすごく楽しみにしてまいりました。

先生の思想の最近の展開の中で多く出てくる言葉で、今日も出ていた〈与贈〉という言葉、これは一般的には「贈与」という言葉が使われると思うんですが、両者の区別というのはどこにあるのかな、と。たとえば、〈与贈〉という言葉は、さきほどから言われていたように互助的な意味を含んだもので、「贈与」の方にはそういう含意がないのだろうか、とか、あるいは集団や社会において、具体的にはどのようなものが「贈与」とは区別される〈与贈〉として交換されるのか、あるいはそれは交換されるものではなくて、一方的なものなのか——。この「贈与」と〈与贈〉の境界を、先生はどのようにお考えになられているのかをうかがえたらと思います。

清水——「贈与」というのは、贈ったものに、「贈与」をした人のかたちが残ります。一方〈与贈〉というのは、〈与贈〉をした

人のかたちを消すんです。そこが一番違うと思いますね。

最初は私も「贈与」という言葉を使っていたんですが、どうも「贈与」という言葉にはいろんなイメージがもう付いちちゃってますね。だから同じ言葉を使わない方がいいんじゃないかというサジェスチョンをいただいて、じゃあ簡単に字をひっくり返しましょう、と。それで生まれてきた言葉です。最初は違和感があつたんだけど、いつも〈与贈〉〈与贈〉と言っていると、どういうことが明らかに becoming するんですね。

たとえば、死ということは自分の〈いのち〉を〈与贈〉することであると私は思っているんですけども、そのときに「私」のかたちは残らない方がいいと思いますね。「私」のかたちは消える。だけどそれは一つの富として、地球の上につながっていく。それが美意識的にも一番いいように感じますね。かたちを残さない、そういうプレゼントというものがあるんじゃないか。

そしてそれは実際に、喜びになると思うんですね。「私」が残ってしまつたら、喜びは減るように思います。「俺はこれをやったのに、あいつは感謝してないじゃないか」とか、そういう気持ちになつてきちゃうんです。「私」のかたちが消えるからこそ、自分の本当の喜びになるんだと思いますね。

会場4—— 以前「かわさき市民アカデミー」で先生のご講義を

受講させてもらった木下と申します。そのときに先生からうかがったお話の中で私の印象に残っていることを自分の住んでいる所の自治会活動に生かせないかと思い、多少自分なりにアレンジをしてやつていまして、そのときのモットーとして、「面倒くさいこと、一見無意味と思われることに對して、進んで喜んで楽しんで〈いのち〉を差し出す」ということを考えてやつています。

元氣なときはそれでいいんですが、わからないことをかを役員の方に相談すると、一気にたたかれるんですね。私はできるだけ与えているつもりなんですけれども、自分が困ったときには差し出してもらえない。たたかれる一方です。十五人の役員のメンバーのうち、男性は一人だけであとはみな女性ばかりなんですが、たとえば自分の娘のことには一生懸命だけれど、地域社会の面倒なことには一切力を貸そうとしない、というような女性たちの中にいると、先生は女性の優れた能力のことを言われていると思うんですが、逆に女性であつても女性本来の良さが出せない、本当に余裕のないような人たちの集まりのようなコミュニティで、こういうふうな場の〈いのち〉を循環させていったらいいのかなと悩んでいます。この一年、自分なりに考えながらやつてはみたんですけど、やつぱりうまくいかないという現状で、それでもこういう思いを捨てずに今後も自分なりに活動することが大事なのかとは思いますが、先生のお考えはいかがでしょう。

清水——やはり一番の問題は、みなさんが自分の方に目を向け
てらっしゃって、なかなか「与える」というその一步を踏み出せ
ないということですね。だから、みんなでやるべき問題を発見す
る、ということが大事です。どんなことでも一番大切なのは、問
題の発見なんです。答えの方じゃないんですよ。

私も、寝る前に問題を発見するんです。私が今やるべき問題と
はなんであるか。それから、その問題が、毎日新しい問題である
ということが大切です。何が問題であるか、その本当の問題を発
見すれば、自分に自信が生まれますし、説得力が生まれると思い
ますよ。

でもそれは容易なことではないですよ。答えを探すよりも、
問題を探す方が難しいかもしれません。問題つてそういうものな
んです。だけどそれは、価値のある問題を発見するということだ
す。いま見えている問題の根底にある価値のある問題とは何であ
るか、それを考えることです。いま手くいかないことは、目の
前の問題ですね。それはなぜそうなっているかという、その奥
に本当の問題があるわけです。その本当の問題はどうすれば解け
るのか——、それは自分に与えられた問題です。それを考えるべ
きですね。表面ばかりを見ないで、どこからそれが出ているかを
考える。それが見つかれば、こういうふうに生きていけばいいと
いう方針が自分に見えてきます。自分の欲を持っていると、問題

が見えません。だから個人というものを捨てていかないと、本当
の問題というのは見えないです。

伊藤——ありがとうございます。では、もうそろそろお時間に
なりますが、最後もうお一方、いかがでしょうか。

会場5——実践桜会の益と申します。先生にお聞きするべき質
問ではないかもわかりませんが、どうしても、どうしてもいじめつてな
くならないのかな、と私は思うんですね。よく動物などを見ると、
雌を獲得するために、雄同士が必死に戦っていて最後の勝者が雌
を獲得したりしますよね。男性には本能的に勝者になりたいとい
うところがあるんじゃないかと思うんですけども、そういうこ
とも含めて、どうしていじめつてなくならないんだろうというこ
とをうかがいたいと思います。

清水——難しい問題ですが、やはり大事なことは、それぞれが
ひとつの場の中に位置づけられるということだと思います。さき
ほど言ったように、同じ状態のものが二つあれば、それは生きて
いけないわけです。けれども、位置づけられることによって、
自分の存在というものが決まっていく。子供の世界でもそうなっ
ていると思うんですよ。

けれど、いじめられている対象のその人を位置づけると、自分たちの存在もちよつと変わってくるというようなことを感じると、そういう人を排除しようと思いますね。これは日本社会でも起きていることです。人種問題や宗教問題というのもそういうところにあるわけですね。

だけど、もつと病的なものがありますよね。場の中に入れないことによつて、敵対関係を作るんですね。生物でも、場を作らなければ競争関係になるわけですよ。だからさきほど言ったことが全部だと思うんですが、存在の場を作ることによつて共存在できるわけです。逆に、何か一つここに入ってくることによつて、自分たちの共存在が脅かされるというふうに思えば、それを排除しようとする。

私たちが子供の頃は、そういういじめつていうのはなかったですね。威張っている子供はいっぱいたんだけど、それはいじめつていう格好にはならなかった。いまはちよつと病的なものがあると思います。社会の中で自己中心的な世界を作ってきたという病的な流れが、いじめの中に反映しているんじゃないかと私は思うんですね。本当の意味で他者を受け入れるということを、社会がしていない。そういう社会や大人を子供は見ているわけです。子供は大人の社会をそういうかたちで反映しているんだと思います。



伊藤——ではお時間も過ぎましたので、今日の清水先生のご講演はここでいったん閉じさせていただきますと思います。清水先生、ご来場のみなさま、ありがとうございました。